

質問

60歳代の女性です。先日、人間ドックの腹部超音波検査で、肝臓の腫瘍を指摘されました。特に症状はありませんが、最近メディアで「肝内胆管がん」が話題になっており、とても心配しています。この病気について、原因や症状、治療法などを教えてください。

「肝内胆管がん」症状や治療法は



木村 哲夫

徳島大学病院  
消化器内科助教

回答

相談者の方は、肝臓に腫瘍を指摘されているのですが、肝腫瘍には心配されている肝内胆管がんなどの悪性腫瘍だけでなく、肝血管腫などの良性腫瘍も多く含まれますので、現段階で心配し過ぎる必要はないでしょう。しかし、この機会に、これまであまり知られていなかった肝内胆管がんについて説明させていただきます。

肝内胆管がんは、肝臓内を走る胆管（胆汁の流れ道）から発生した悪性の腫瘍で、その頻度は原発性肝がんの3~5%程度（円ク

世界的に増加傾向の疾患

ラフ参照)ですが、世界的にも増加傾向にある疾患です。これまで原因は明らかではありませんでしたが、近年、B型肝炎やC型肝炎、アルコール性肝障害との関連が報告されるようになってきました。

症状としては黄疸や腹痛

などがありますが、これらは進行した状態まで現れないことがほとんどです。そのため、多くは検診や人間ドックでの血液検査で肝胆道系酵素の上昇が認められたり、腹部超音波検査やCT検査で異常を指摘されたりすることなどをきっかけに見られます。

肝内胆管がんは、その広

がり方や形態から次の三つのタイプに分類されています。それは①「腫瘍形成型」肝臓内に塊状の腫瘍を形成する②「胆管浸潤型」胆管壁に沿って腫瘍が広がっている③「胆管内発育型」胆管内腔へ腫瘍が隆起しているの3タイプです。

肝内胆管がんの治療は外科的手術が原則で、病変部を含む肝臓を切除することになります。前述の①腫瘍形成型および③胆管内発育型で、病変が肝内のある程度の範囲にとどまっている場合は肝部分切除術が行われます。

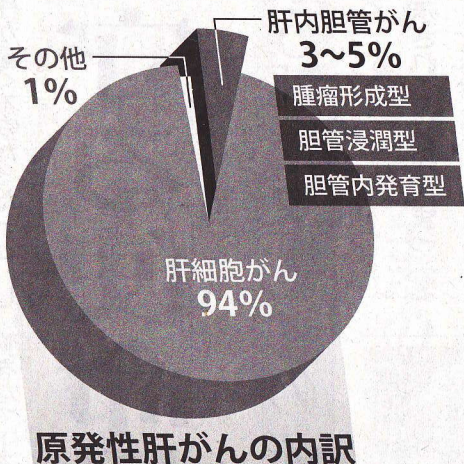
一方、胆管浸潤型の場合は肝外へ広がりやすい傾向

にあり、肝外の胆管を含む広範囲の肝切除術が必要となることもあります。さらに、肝内胆管がんはリンパ節へも転移しやすく、これが疑われるときは周囲の「リンパ節郭清」(リンパ節の切除)も行われます。

また、黄疸を認める場合には、胆汁がつま滞による肝機能の低下を防ぐことを目的に、胆汁を体外もしくは腸内へ排出する処置(胆汁ドレナージ)を、手術に先立って行うことがあります。

外科的手術で根治できれば、治療は終了となりますが、病変が残っていたり、再発を認めたりした場合のほか、手術での完全切除が難しいと予想される際には、抗がん剤による化学療法が行われます。抗がん剤による治療成績は近年向上しており、数々の有効性が報告されてきています。

肝内胆管がんは進行するまで症状が出ず、発見しにくい病気ですが、他の多くの悪性疾患と同様に完全治療のためには早期発見が重要となります。定期的な検診や人間ドックでのチェックを心掛けてください。(第4土曜掲載)



完治には早期発見が重要

がんに関する質問は徳島がん対策センター(電話088-(634)6442) (平日午前8時半から午後5時まで)にお寄せください。詳しくはセンターのホームページ<http://www.toku-gantaisaku.jp>をご覧ください。

